２００５年、ジャパ・ベトナムのツアーに参加して

小野　浩美

今年は、日本の戦後６０年、ベトナムの戦後３０年にあたる。日本の戦後３０年は、高度経済成長の波に乗り、めざましい復興を遂げた。ベトナムでは、ようやく経済が上向き人々の生活は回復しつつあるが、依然苦闘を続けている。特に、農村地域の末端部や都市のスラム地域で、問題は山積みしている。長い戦争がもたらした社会へのダメージがいかに大きいものか、痛感せざるをえない。だが、今ベトナムは平和の中にあり、人々は着実にねばり強く、復興へ向けて歩み続けている。コミュニティを軸とした様々な取り組みには、学ばされることが多い。以下、今年のジャパ・ベトナムのツアーに参加して、見聞きしたことをレポートする。

◇カオバン省／母子保健教育プロジェクト・小児科医療機具

カオバン省の人口は５２万人で、８つの民族が居住している。省立病院は２つ（１つは東洋医学の病院）あるが、私たちが訪問した第２病院は、ベッド数２５２、２５の診療科がある総合病院で、７２人の医者が働いている。病院で働いている人の７２％は女性だとの話であるが、女性の医者も多く、病院長及び小児科長も女性で、病院の雰囲気はなごやかである。

昨年行った支援（４５００ドル）で、省立病院小児科の温水シャワー１台、薬を保管するための冷蔵庫、２つの県での健康教育プログラムを行った。私たちが泊まったホテルは、各部屋エアコン、温水シャワーつきだが、省立病院小児科でエアコンがついているのは救急室のみ、温水シャワーは今回つけられたものが１台だけである。来年の支援でモニター機の申請があったが、値段が上がって買うのは無理とわかり、酸素吸入器に変更された。東京の病院ではたいていどこでも見かけるモニター機だが、ここではまだ高くて買うことができない。

今年は、カオバン市から西に４５キロ離れたグエンビン県を訪問し、県立病院、市場、史跡、などを見学させてもらった。省都から離れた地方に住む人々の生活に触れることができ、大変勉強になった。グエンビン県は、面積８３７平方キロ、人口約４万人で、その５０％はザオ族である。県立病院は２００３年に建てられたばかりで、ベッド数５０、医師８人、看護婦２０人で運営され、治療費、薬代は無料である。２０キロ離れたところにもう１つの県立病院（ベッド数２０）がある。病院の近くに学校（２クラス）があるが、学校に行けない子どもも多いという。市場は同じ民族衣装を着た女性達でにぎわっていた。若い人もおばあさんもいる。周辺の山から県の中心にあるこの市場まで歩いてやってきて野菜などを売り、必要なものを買って、また山道を歩いて家に戻っていく。どれほどの距離を歩くのだろう。女性達は何人か集まって楽しげにおしゃべりをし、物質的には決して豊かとは言えないだろうが、落ち着いた昔ながらの生活を続けている様子がうかがえた。

◇ゲアン省／道路補修・識字教室

ゲアン省は人口約２８６万人で、革命の指導者ホーチミンの生家がある省だが、ベトナムの最も貧しい省の１つに数えられている。ジャパ・ベトナムはこの省で、約３０キロ離れた２つの地域を中心に支援を継続している。１カ所はジエンチャウ県にある、田んぼが広がる中にぽつんと建つ教会を取り囲むように家が並ぶ２つの村で、これまで飲料用ため池の整備、壊れた橋の修理、道路補修、診療所建設、医者の奨学金などの支援を行ってき

た。プロジェクトの責任者である神父さんは、周辺に６カ所ほどの担当地域を持ち、それぞれの村からの申請を持ってくる。一面に青々とした水田が広がる田園風景は本当に美しく、豊かな感じを受けるが、他に特産物もなく１人あたりに支給される農地面積が狭いこの地域の生活は貧しい。台風で稲に被害がでると即生活に困り、都市に出稼ぎに出る人も多い。滅多に外国人が訪れることもない村では、私たちが訪問すると、村人や子どもたちが物珍しげに集まり、人なつこい笑顔で私たちを迎えてくれる。ジャパ・ベトナムの支援で、今年は道路を補修し、村の生活環境は少しずつ整えられてきているが、村をめぐる排水溝の支援を新たに申請された。

もう１カ所は、ビン市に近いフングエン県にある村で、１人の篤志家が様々なプロジェクトを企画し、教会の信徒委員会のメンバーが中心となって運営をすすめている。養豚プロジェクトへの支援がこの村との関わりの出発であるが、今年訪問した時は識字教室の建物が５年越しでようやく完成し、教室が始まっていた。ベトナム戦争時学齢期だった女性は学校に行けなかったため、字の読み書きができない。そのためこの村に住む１２０人の婦人のうち８０人は非識字者であり、今５０人の女性がこの教室で勉強をしているという。部屋が空いている時は、子どもたちに料理や楽器を教えることにも使われているという。いわば地域のコミュニティセンターのような場になっている。ベトナムの他の地域では、教会の横にこのような多目的ホールを備えたところもあるが、ここではまだ自力でそうした建物を建てる資金がない。この村での養豚プロジェクトの成果をふまえて、近くにある他の二つの村にも支援して養豚が始まったが、その村でも識字教室を始めたいとの話が出された。今のところ三つの村であるが、何とか支援していきたいものだと思う。なお、教室とあわせて教室で使う水の貯水槽（隣の教会の屋根から雨水を集め、浄化槽を通して貯めて使う）もつくられた。ジエンチャウ県、フングエン県ともに山が少ない海岸沿いにあり、飲料水の確保に苦労し、工夫を凝らして貯め水をしている。

◇ビントゥアン省／貧しい人の家づくり・牛バンクプロジェクト

ビントゥアン省は、人口約１０５万人だが、北から移住した人も多い。社会活動に熱心な司教がまとめていることもあって、教区の司祭は村の復興のため、様々な努力を重ねている。司教から村の状況を聞く中で、省内のあちこちの村に、道路、橋、農地開墾、ダム、養殖、車いす、奨学金など、基盤整備プロジェクトを中心とした支援を行ってきた。

その中で今、特に注目しているのは牛バンクプロジェクトである。ハムタン県の海岸に近い村で、１９９９年にスペインからの助成金を得て、４０頭の牛を貧しい農家に貸し与えるプロジェクトが始まった。牛委員会がしっかりと運営をすすめたことが功を奏し、２期で飼育農家は７３軒になり、残った牛を売り新しい牛を購入して３期目にはいる。村の饑餓世帯はなくなり、牛の利益で貧しい家の子どもの奨学金もまかなわれた。牛バンクプロジェクトは、村人の自立のためのプロジェクトとして、モデルケースになった。その後ここから６０キロ離れたドゥックリン県で、ハムタン県の経験に学びながら牛バンクをやりたいとの話があり、８頭の牛（３０００ドル）を支援した。少数民族の村人を対象にした牛バンクが、今すすめられている。

貧しい農民は、雨漏りがし、壁もボロボロになった今にも崩れそうな家に住んでいる。つらい農作業から戻った彼らは、家でゆっくり休むこともできない。司教はそのことに心を痛め、省の中で特にひどい家を建て直すプロェジェクトを２０００年からはじめ、１軒

あたり５００万ドン（約３万６千円）で１０００軒以上の家を新築してきた。去年、ハムトゥアンナム県の村を訪問した時に、村の神父から、貧しい家の建て直しを申請されその家を見に行った。折から雨が降りしきり、訪れた家では雨漏りのする暗い中で、子どもがベッドで横になっていた。ジャパ・ベトナムは２０００ドルの支援を決め、６軒の家が建て直された。今年訪問した時に、その全部の家に案内してもらい、家族と話をした。父親が亡くなり母親と子どもが暮らす家族、道路沿いで小さな店を営む家族、９８才の母親とその娘の２人家族などで、戦争中はあちこちを転々とした話なども聞かされた。家が新しくなり、喜びに満ちた笑顔を、忘れることができない。

◇ホーチミン市／スラム住民自立プロジェクト・エイズ予防啓発活動

ホーチミン市の中に点在するスラムは、地方から移住してきた人々などが住み、無登録、失業、麻薬使用、セックスワーク、学校に行けない子ども、エイズ感染、等々、様々な矛盾が凝縮された地域である。

Vanさんを中心とするスタッフ５～６人のグループは、１９９０年頃からスラム地域で、住民の抱える問題を解決し、自立を促す様々な活動を行ってきた。ジャパ・ベトナムは、１９９１年に Van さんと知り合い、以来このグループに毎年支援を続けている。Van さんのグループは毎年訪問する私たちを、イベントを企画して招待したり、スラムに案内してくれたりする。今年は半日、ホーチミン市の喫茶店で、Van さんのグループがサポートする、イベントグループやエイズ感染者自助グループ、スラムで貯蓄組合などの活動をするお母さん達のグループなどが集まり、交流会とゲームや歌、人形劇、エイズ啓発が行われ、そこに参加させてもらった。そして半日は、４つに分かれて別々のスラムを訪問した。

スタッフは毎日、手分けして各スラムを訪問しているが、自分たちが世話焼きになるのではなく、５０～１００世帯が生活するスラムの住民の中にリーダーや積極的に活動に関わるグループをつくり、住民自身が活動を考え実行するよう促しているのが特徴である。その考え方とやり方、住民から寄せられる信頼に共感して、長いつきあいが続いている。

今回私は、６年前火事で焼失し、政府が再建した長屋に４１家族が住むスラムに案内してもらった。住民は、裁縫をしたり、刺繍をしたり、おもちゃをつくったりして、生計を立てている。何軒かの家に上がりこんで、家族のことや仕事のこと、子どものこと、家賃のことなど、話を聞かせてもらった。感染した若者が横たわるそばで、交通事故で足にけがをしたお母さんが話してくれた家もあり、いたたまれない気持ちだったが、お母さんは子どもの背中をさすりながら落ち着いた様子で、胸を打たれた。

※　字数の都合上、他に訪問した、ビンフック省、ソックチャン省、ホーチミン市タオダン・グループの報告は、割愛します。

２００５年９月２６日　作成